

# 郷土資料の 散歩道

図書館郷土資料室

☎21-6111内線6201

## 飯豊の山ぶみ

一六六年前の

飯豊山登山の紀行文

今回は、天保九年(一八三八)に米沢藩士の泉崎賢親が友人と飯豊山(二一〇五m)に登った時の紀行文「飯豊の山ぶみ」を紹介しします。

著者の泉崎賢親は、右筆を勤める家臣で、優れた歌人(号・真畔)でした。友人の佐藤秀臣(絵に秀で「米沢文晁」と称された。号・雪斎)に誘われ、飯豊山頂から日本海を眺めて和歌を詠む目

※文書・記録の執筆にあたる役職

江戸時代、飯豊山は五穀豊穰を願う信仰の山で、各地に建つ「飯豊山碑」は信仰が盛んであったことを物語っています。そのため当時は、二十一日間、水垢離などで心身を清めてから登る習しでした。ところが泉崎一行は、歌を詠むためと、精進潔斎しないで登りました。

### 登山の行程 山頂は大嵐

泉崎と佐藤が  
出したのは七  
月二十二日(新  
暦では九月十  
日)の夜明け前、  
矢子・口田沢を  
経て長峰峠で朝  
食、玉庭の御伊  
勢町から西に進  
み菅沼峠で昼  
食、須郷村、白  
川村を通り岩倉  
村で宿泊、ここ  
で友人氏家高庸  
と合流します。

翌日、三人は村人二人を伴い大日ま  
で登り朝食。あいにくの雨が降り出し  
た中、ザンゲ坂という急な坂を鎖を伝  
って登り、御田植(現・御田)に到着。



▶「飯豊の山ぶみ」大日の部分  
大日には現在大日杉登山小屋が建つ。挿絵に  
は杉の巨木(大日杉)が描かれているが、現在は  
切り株が残るだけ。

御田植は、田植えの真似をして豊作を  
祈る場所でした。  
御田植から滝切合、地藏岳、目洗、  
御坪山、切合(会津からの登山道との  
合流点)、草履山(ここで草鞋を履き替  
える)を経て、山頂手前の姥権現によ  
うやく到着し  
ます。

しかし、山頂  
付近は潔斎しな  
かった神罰なの  
か大嵐で、泉崎  
は疲れきって動  
けなくなり山頂  
へ登るのを断  
念。佐藤ら四人  
が山頂の飯豊山  
本社に参拝し、  
泉崎は嵐の中、  
寒さに震えなが  
ら一人心細く仲  
間が戻るのを待  
ちました。

帰路は地藏  
岳の室で一泊  
し、翌日は大  
日まで下り朝  
食を取り、岩  
倉で昼食、須郷村で一泊。四日目、疲  
れの取れた一行は、風景を楽しみなが  
ら夕方に米沢に到着しました。

### 歌人・画家による 趣ある紀行文

趣ある紀行文

旅の後、泉崎が和歌・漢詩を交え本文を作り、佐藤が挿絵を描き「飯豊の山ぶみ」が完成しました。趣ある名文と、絵の名手が描いた挿絵により、自分が登山しているように、楽しく読ませてください。また、江戸時代の村々の生活、飯豊山に対する信仰、登山の様子を知らせてくれる大変貴重な資料です。現在は図書館で所蔵しています。

なお、この「飯豊の山ぶみ」は平成八年に米沢古文書研究会により復刻出版され、飯豊山の研究や古文書解読のテキストに利用されています。

◎復刻版の問合せ／米沢古文書研究会 ☎23-1870

◀姥権現から飯豊山山頂を描いた挿絵  
横なぐりの雨風の中、佐藤はスケッチする余裕がなかったためか、この挿絵は泉崎が描いたもの。目の前の岩場の坂を登ると、山頂の飯豊山本社に到着するが、泉崎はここで登頂を断念。

